

パフォーマンス評価による「指導と評価の一体化」の取り組み

埼玉県立朝霞高等学校 春日井 優

要旨 今年度から高等学校においても実施された新学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能の習得だけでなく、その知識・技能を活用できる思考力・判断力・表現力を育むことも求められている。これらの能力を含めたさまざまな能力を、パフォーマンス評価により把握し指導に活かす授業実践を行った。その授業実践を紹介するとともに、授業実践についての考察も行う。

1. パフォーマンス評価

今年度から高等学校においても新学習指導要領による授業が開始された。この新学習指導要領では、基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得することが求められている。さらに、思考力・判断力・表現力の育成が求められている⁽¹⁾。

従来から行われている客観テストでは、知識や技能は比較的測りやすいが、思考力・判断力・表現力を測ることは難しい。このような背景から、小中学校を中心に、パフォーマンス評価(performance assessment)を活用した授業実践⁽²⁾が行われている。

パフォーマンス評価とは、「ある特定の文脈のもとで、様々な知識や技能などを用いて行われる人のふるまいや作品を、直接的に評価する方法」である⁽³⁾。すなわち、実際に何かをやらせてみて(パフォーマンスさせてみて)、直接的に学力を評価しようとするものである。パフォーマンス評価では、パフォーマンス課題(performance task)を与えて解決・遂行させて評価するという手順によって行われる。

ここで、パフォーマンス課題とは、さまざまな知識やスキルを総合的に活用する複雑な課題である。具体的には、論説文やレポート、展示物といった完成作品(プロダクト)や、スピーチやプレゼンテーション、実験の実施といった実演(狭義のパフォーマンス)を評価する課題のことである⁽³⁾。

2. 学習評価

ここで評価についての考え方を確認したい。日本語では、単に「評価」と表現しているが、英語では「評価」に相当する語として「evaluation」、「assessment」がある。これらの語は、教育学者や論文等の著者によって、若干の定義は異なるが、「evaluation」は数値や点数などにより価値を同定されるものである。また、「assessment」は点数なども含まれるがそれだけではなく、質的に表現され次の学習に示唆を与えるものである。パフォーマンス評価では、「学校や教師が、学習指導や学習活動にいかせるために学力の状態を把握する

こと」が第一の目的であること⁽⁴⁾から、評価の在り方として「assessment」としての評価を行うものである。(以下、「評価」は「assessment」としての評価を示すものとする。)

ここで、パフォーマンス評価は多くの場合ルーブリックを用いて行われるが、評価手法として表1のようにルーブリックを用いない評価もある⁽⁵⁾。これらの評価も組み合わせることにより、多面的な評価を行うことができる。

表1 ポートフォリオ活動での学習の評価手法

	学習者自身による	学習者相互・教師による
ルーブリックを用いる	自己評価 self-assessment	相互評価 peer-assessment
ルーブリックを用いない	内省 reflection	アドバイス advice

3. 授業実践

3.1 授業の概要

科目 社会と情報

単元 情報社会の課題とモラル
情報セキュリティの確保
(パスワードによる個人認証)

時数 5時間

1時限 個人認証についての講義

2~4時限 パフォーマンス課題

5時限 振り返り

この授業を行う直前に、コンピュータ室のユーザ認証の方法を学習し、生徒自身でパスワードの設定を行った。

3.2 パフォーマンス課題の設定

本授業において設定したパフォーマンス課題は次のとおりである。

課題:「パスワードを保護することが重要である」ということを、多くの人に伝えるようなパンフレットをA4の紙1枚(片面でよい)を作成しなさい。このとき、単に「保護が重要」であることを書くだけでなく、他人に漏れた場合の危険性、パス

ワードの決め方のような保護するための方法など「パスワードの保護」をするために必要なこともないように含めなさい。

この課題に取り組ませるにあたり、パスワードが漏れた場合の危険性、推測されやすいパスワード、パスワードの不正入手法について調べてワークシートにまとめることも同時進行で行わせた。

このような課題を設定した理由は、「パスワードを自分で決めた直後であるため課題に現実味があり、そこから文章化するプロセスを含むこと」「必要なことを調べたり、文章を構成したりする思考のプロセスを表現することを要求できること」「多様な表現が期待できること」である。

3.3 「指導と評価の一体化」の取り組み

本節ではパフォーマンス課題に取り組んでいる際に行った指導と評価について述べる。

生徒は各自の進度に合わせて、パンフレット作成に必要な事柄を調べ、それを元にパンフレットを作成する活動を行った。この活動を行なっている間、生徒のパフォーマンスの評価を一人一人に対してアドバイスにより行った。具体的には、検索がうまくできていないという評価の生徒に対して、キーワードの決め方の指導を行った。また、パスワードの不正入手法とその対策が対応していない生徒に対して、それらの対応の確認を行う指導を行った。このように個別に学習の状況の評価し、それぞれの生徒に指導を行うことにより「指導と評価の一体化」につなげることができた。

また、ときどき隣の生徒同士で互いのパンフレットを見比べさせ簡単なコメントをする形式でのアドバイスによる相互評価を行った。このコメントにより、パンフレットを改善することにつながり、生徒の観点を活かした指導とすることができた。

さらに、振り返りの時間には、生徒に本単元による学習の振り返りを行わせた。このとき、学習内容だけではなく、この学習を通して自己の学習状況についての内省も観点を与えることにより行った。これにより、内省による自己評価を元にして1年間の「社会と情報」の授業を通しての目標をもたせるという指導につなげられた。図2に生徒の振り返りの例を示す。

パスワードはとて大変なものだと感じました。パスワードがむねたり悪用されたり、自分になりすましてしまうから大変だと思いました。そのためには、パスワードもつくを際、自分自身からいようなパスワードを考えた方がいいと思います。エンターキーの操作が全然わからなくて、左だけに聞いているので自分自身で出来るようにしたいです。パンフレットの内容も私めが作ったので、その上にはいれたいと思います。

図1 生徒が行った単元を通しての振り返り

4. 授業実践についての考察

4.1 パフォーマンス評価による効果

パフォーマンス評価により、さまざまな観点から生徒の学習状況についての評価を行うことができた。今回の授業において、特に顕著にみられたアドバイスを表2に示す。

情報科の授業には生徒のさまざまな活動を埋め込むことができる。そのため、情報科とパフォーマンス評価の相性はよいと考えられる。

表2 パフォーマンス評価での主なアドバイス

- ・講義のノートに必要なに応じて記録できていない
- ・検索のキーワードが適切でない
- ・パンフレットのデザインが効果的でない
- ・不正入手法とその対応策が対応していない

4.2 パフォーマンス評価での課題

パフォーマンス評価を行うことにより、きめ細かい評価と指導を行うことができる。しかし、課題もある。

まず、パフォーマンス課題の設定は難しい。授業で身に付けさせたい能力と対応するようパフォーマンス課題を設定する必要がある。この対応を踏まえた教材の開発が必要である。

今回の授業ではインフォーマルな評価について述べたが、フォーマルな評価では妥当性・信頼性が求められる。このためにルーブリックが必要になるが、適切なルーブリックを作ることが難しい。また、適切なルーブリックを生徒に示したり、生徒に作らせることができれば、生徒の学習の指標とさせることができる。今後の課題としたい。

5. まとめ

今回の授業実践では、パフォーマンス評価を行うことで「指導と評価の一体化」の授業実践を行った。今回の実践では評価を通して1年間の授業の目標設定も行ったが、生徒自身が質的变化としての成長を実感できるようになるためにはポートフォリオの活用が必要である。ポートフォリオ評価とも併せて実践に取り組んでいきたいと考えている。

参考文献

- (1) 学習指導要領(2009)文部科学省
- (2) パフォーマンス評価で授業改革(2013)田中耕治著 香川大学教育学部附属高松小学校著
- (3) パフォーマンス評価(2007)松下佳代
- (4) 育成すべき資質・能力を踏まえた教育目標・内容と評価の在り方に関する検討会(第2回配布参考資料)(2013)西岡加名恵
- (5) e-Learning 環境における形式的記述手法の開発と応用(2007)森本康彦